【用語】披見―手紙などを開いて見ること　厳寒―厳しい寒さ　公方―将軍　御機嫌―将軍家の安否　仕合―しあわせ、幸福な様

【解説】宝永四年（一七〇七）館林藩主となった越智松平氏は、享保十三年（一七二八）陸奥国棚倉城（福島県棚倉町）へ移封された。しかし、延享三年（一七四六）再び館林城への転封を命じられ、ここに第二次越智松平氏の藩政が始まった。越智松平氏は将軍家の血筋を引く名門で、とくに藩主武元は人柄・力量ともに優れ、八代将軍吉宗の厚い信頼を受けたといわれている。延享三年五月、九代家重の時に西の丸老中に就任して以来、十代家治の安永八年（一七七九）まで、実に三〇年余り本丸老中や勝手掛老中などを歴任し、幕閣の中心で活躍した。

この文書は、老中松平武元が但馬国出石城主（兵庫県出石町）の仙石越前守政辰にあてた、いわゆる老中奉書である。老中奉書とは、一般に幕府老中が将軍の意志や命令を奉じて他に伝達する文書のことで、将軍関係の文書のなかでは最も代表的なものである。しかし、この文書の場合、仙石政辰が塩鮎一桶を将軍家に献上したことに対して老中の松平武元が発したもので、幕府老中返札ともいわれる。老中返札は将軍家への年頭挨拶や御機嫌窺いなど、幕藩間の儀礼的な分野において返礼状として使用され、差出人も月番老中単独で一判の様式が通例であった。また折紙形式の文書は、竪紙に比べて略式を意味している。なお、この文書は館林市指定の重要文化財である。